学習内容報告書 フォーマット

学校名	岩手県　矢巾町立不動小学校
授業者	高橋　裕子　吉岡　裕晃

1.　単元計画

実施した活動内容に基づきご記入ください。

1-1.　単元名

地球温暖化を防ごう隊

1-2.　学年

５年生

1-3.　教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

総合的な学習の時間

1-4.　単元の概要

６月　地球温暖化を防ごう隊の結成・・・オリエンテーション
７月　課題研究に向けて　事前学習
８月　事前学習・グループ編成
９月　研究課題設定
１０月　海洋教育講演会・・・・・・・・・・ケンタロ・オノ氏による講演会
講演会を聴いて・・・・・・・・・・振り返り
１１月～２月　課題研究　岩手大学の学生を招いて共同討議
課題研究　教室　図書室　ＰＣ室　各グループ研究
情報収集　実地調査　情報の整理　発表資料作成
２月　海洋パイオニアスクール課題研究　紙面発表

1-5.　単元設定の理由・ねらい

地球温暖化について、高学年では理科や社会の単元において授業で取り扱っているが、その学習内容については、実生活とは遠いものと思われがちであった。しかし、近年、異常気象等による災害が頻繁に身近に起こることにより、私たちにとっても重大な問題であると意識が変わってきた。何が問題なのか、それを解決するために、何をどのように学び、何ができるようになればよいか、海洋学習の視点から問題解決学習に取り組む。

1-6.　育みたい資質や能力、態度

1	具体的な活動や体験を通して、情報を収集し、その情報を整理することができるようにする。
2	学習を通して、問題を自分との関わりで捉え、生活と関連づけて考え表現することができるようにする。
3	自分のできることを考え、提案し行動することができるようにする。
4	大学生と交流することで、学校内から広がったコミュニケーション能力の育成

1-7.　単元の展開（全　　時間）

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
2	オリエンテーション	学習の目的・学習方法・学習計画 使用教材　　自作　プレゼンテーション資料
3	事前学習とグループ編成 研究課題の設定	グループ編成 課題設定のための協議 使用教材　　学習プリント
2	海洋教育講演会 「国がなくなる！ 　キリバス共和国と地球温暖化」 　　講師　ケンタロ・オノ　氏	ケンタロ・オノ氏を招いての講演会 評価：講演を聴いての感想を作成
12	課題研究 〇情報収集、まとめ 〇発表資料作成 〇発表練習	情報収集指導 　大学生との共同討議　インターネット活用 　資料作成指導　タブレットによる資料作成
1	学習の振り返り	単元　地球温暖化を防ごう隊 　　学びの振り返りを行い感想にまとめる

2.　学習活動の実際

実施した単元中のキーとなるような時間（導入の時間・主となる活動の時間・まとめの時間など）の学習内容をご記入ください。また、複数の時間についてご記入いただける場合には、この項目をコピーして複数記入していただいて構いません。

2-1.　単元における位置づけ

単元　20　時間中の　1　時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目　/ 単元 15 時間中の 4, 5 時間目

2-2.　本時の目標

・内陸にある矢巾も、地球規模で考えると島国日本の一部であり、海と関わっていることを理解する。
・地球温暖化は、矢巾町にすむ私たちにとっても重要な問題であることに気づく。
・地球温暖化について海洋学習の視点から、問題解決学習に取り組むための意欲を高める。

2-3.　本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点（方法）
導入	
１なぜ矢巾町で海洋教育を行うのか理解する	○日本地図、世界地図を通して、矢巾町も島国日本の一部であることを確認させる。 ○海は私たちの生活に深く関わっていることを理解させる。
展開	
２日本や矢巾町を見舞う自然災害について学ぶ	○近年の異常気象や矢巾町が経験した豪雨災害について振り返りを行い、地球温暖化が原因である可能性が高いことを確認する。
３地球温暖化によって困っている国について学ぶ	○海面上昇により国土が沈む危機に貧している国があることを知る。
４研究課題の設定	○研究課題を設定する
まとめ	
５自分自身の未来として考える	○自分の未来として具体的に考える。 ○具体的な研究方法について確認する ○自分が具体的にできることを考える。

3.　今回の活動の自己評価

当初の計画では、海洋教育の先進校とのリモートで交流を計画したが、新型コロナウイルスのために、本校の教育課程が影響を受けたために計画変更を余儀なくされた。

しかし、リモートを活用して行ったケンタロ・オノ氏の講演会は、児童の学習意欲を高め、大きな成果であった。

また、岩手大学の協力を得て、リモートで学生に授業や取り組みに参加してもらい、学生と一緒に学習を進めたことが児童の意欲喚起につながった。

リモート技術の活用を、教職員が習得したこと、また、児童が違和感なくリモートの学習を受け入れることができたことが成果であった。

4.　今後の課題

学校の年間計画にどのように位置づけていくか。また、助成がない場合、どのように予算措置を講じるかが課題である。

リモートにより、講演会、岩手大学との交流はできたが、対面と同等とは行かなかった。しかし、スケジュール調整のしやすさ、旅費等費用の縮小など大きなメリットがあることも感じた。

対面とリモートのバランスを考えて行きたい。

5.　本学習内容報告書活用にあたっての留意点

特記事項はありません。

リモートによる学生との共同討議

ケンタロ・オノ氏講演会（リモート）